



おすすすめの一冊

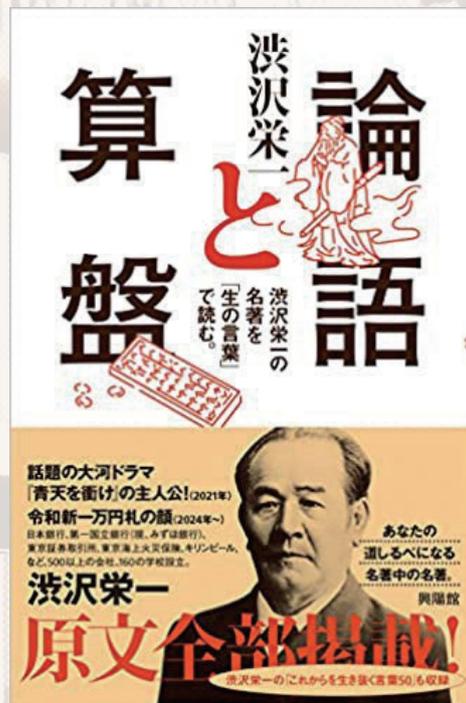
『澁沢栄一』論語と算盤——澁沢栄一の名著を「生の言葉」で読む。』

N HK大河ドラマ「青天を衝け」を毎週テレビで見ているうちに、

近代日本経済の父とか、日本資本主義の父といわれている主人公・澁沢栄一の、その波乱万丈の人生に想いを巡らすようになった。農民から、倒幕志士、武士、幕臣、明治政府高官、起業家となっていく経緯については他の伝記小説に詳しい。

大河ドラマの影響もあり、本屋の店頭にはたくさん澁沢栄一関連の本が並んでいる。その中で興陽館発行の本書が目についた。本書は、澁沢栄一の原文を、よりわかりやすくするためのいろいろな工夫がなされている。

この本は、歴史的名著『論語と算盤』を新編集で刊行した点に特色がある。すなわち、この『論語と算盤』の全文を原文で収録しただけでなく、各章の冒頭に現代語の「あらすじ」を設けることで、澁沢栄一の「生の言葉」に触れるとともに、本人が実際にどのような考え、どのように行動したかが、よ



論語と算盤
澁沢栄一の名著を「生の言葉」で読む。
澁沢栄一 著
興陽館

り理解しやすくなっている。

澁沢栄一は、生涯で500社以上もの有名企業を創設したという。たった6歳で孔子の『論語』を読み始め、その思想に大きな感銘を受けて、これを生涯、自らの人生の指針にしたという。そして長ずるにつれ、それを商業の世界で役立てようと決心し、日本で初めて株式会社をつくり、多数の会社の創業と経営に関わるとともに、銀行と金融の仕組みを確立するという、日本の

資本主義の確立に不可欠な役割を果たしたとされている。

「論語」と「算盤」の関係について、本文では、「これははなはだ不釣合で、大変に懸隔したものであるけれども、私は不断にこの算盤は論語によってできていて、論語はまた算盤によって本当の富が活動されるものである、ゆえに論語と算盤は、はなはだ遠くしてはなはだ近いものであると始終論じておるのである。」とし、「ここにおいて論

語と算盤という懸け離れたものを一致させることが、今日の緊要の務めと自分では考えているのである。」と締めくくっている。

その他の内容の一部を紹介すると、「算盤と権利」の章では、社会の利益になる正しい競争をすることが必要であるということが述べられている。「余が思うには善意なる競争に努めて、悪意なる競争は切に避けるのである。」との一文は、とっさに、現在の不正競争防止法という法律を彷彿とさせるが、ここで述べられているのは、それより広い意味である。

また、「教育と情誼」の章では、女性の教育の重要性が述べられている。封建時代からの名残で女性の教育がおろそかにされてきたが、女子も社会を組織する上にその一半を負って立つ者であるから、男子同様重んぶべき者であるとしている。これは、江戸時代から生きてきた人の言葉として重みがあり、現在においても通じることである。

小海 正勝

こうみ まさかつ

東京都予防医学協会監事。1963年中央大学法学部卒業後、1965年に弁護士登録。最高裁判所司法研修所教官、東京大学大学院医学系研究科非常勤講師、東京女子医科大学大学院非常勤講師、中央大学法科大学院特任教授等を歴任し、2000年より現職。2003年より予防医学事業中央会監事。